

## 手に取って選べる APLAのアンテナショップがオープン

2021年6月、水道橋(東京都千代田区)のあめにていCAFE梨の木舎内にオープンしたAPLAのアンテナショップ。皆さん、立ち寄っていただけましたか。

ネットショップは実際に商品を見て買うことができませんが、ここでは、直接商品を手にとって選択することができます(バナナ以外)。買う前に確かめたいと思っている方にはおすすめです。

買い物のほか、併設運営の梨の木ピースカフェにて、自家焙煎の東ティモールコーヒーを飲むこともできます。また、様々な種類の本が読めるようになっているので、おいしいコーヒーを飲みながら読書を楽しむこともできますよ。買い物を楽しみ、新しい本と出会い、おいしい時間を過ごせる、すてきな空間です。

APLAスタッフによるカフェ営業やお話なども少しずつ始まっています。APLAのインスタライブもここから発信しています。今後実際に人とつながれるこのスペースを活用し、楽しい企画をお届けしたいと考えています。詳細はSNSなどで発信していきますので、ご注目ください。

福島智子(ふくしま・ともこ/APLA)

### APLAのアンテナショップ CAFE梨の木舎内

【営業日時】 水金:10時半から18時/月火木:12時から19時(祝日はお休み)

【住所】 東京都千代田区神田三崎町2-2-12 エコービル1階(最寄駅:JR水道橋駅)



特定非営利活動法人APLA(Alternative People's Linkage in Asia)  
フィリピン・ネグロス島の30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 [www.apla.jp](http://www.apla.jp)

株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)  
バラゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者を顔と顔が見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <https://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F  
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp

過去のPtoP NEWSはこちらから

特定非営利活動法人APLA

# 人から人へ PtoP NEWS vol.46 2021.10

PtoP: 作る人と食べる人が共に支え合う仕組み



特集

## 大規模地震から2年、被災地の現在 〜ミンダナオ島マキララ〜



2019年10月、地震で全壊してから2年、自然素材で再建したドンボスコの新社務所

## バナナの袋がけ この道具あり! 竹製の手作り梯子

from フィリピン・ネグロス島

バラゴンバナナ

は地場バナナで元々手入れをすることはありませんでした。しかし、品質の良いバナナを日本に届けるために、「キズがついては困る」ことになったのです。そのため袋がけが奨励されましたが、困ったことにバラゴンは背が高くなる品種で袋をかけるにはバナナによじ登らないと手が届きません。しかしバナナは木ではないので、体重がかかると倒れてしまいます。

ネグロス島の生産者は、バナナ栽培においてはパイオニアであったミンダナオ島のバラゴンバナナ生産者に手入れの手ほどきを受けました。紹介された道具が、竹でつくる梯子でした。太い竹一本に足場をくりぬいた“シングル梯子”、そして2本の竹を繋いでつくる“ダブル梯子”の2種類を教えられました。急傾斜地では“シングル梯子”が使われるようです。

それにしても梯子はネグロスのバナナ生産者にとっては初めての道具。使い方を習得するのは容易ではなく、特に傾斜地での梯子の使用は至難の技です。当初慣れない頃は、梯子がはずれたり、梯子から落ちてケガをしたりする生産者もいました。

こうした生産者の努力のおかげでバラゴンバナナは私たちに届いています。

幕田恵美子(まくた・えみこ/ATJ)



シングル梯子



ダブル梯子



産地の暮らしを垣間見る  
1枚の写真から

## イエスも触れた?

from  
パレスチナ

**聖地** エルサレムを見下ろすオリブ山。ゲッセマネの園はその麓にあり、イエスが弟子たちと最後の晩餐を取った後にここで夜を過ごし、十字架刑を受けることの苦悩を祈ったと新約聖書にも登場する歴史的な場所です。節くれ立ったオリブの古木はイエスの時代からあったと思わせるに十分な貫禄。園丁に聞くと十数本のオリブの木から今でも数百キロのオリブの実が収穫出来るとのこと。

ちなみにゲッセマネとはヘブライ語で「オリブの油搾り」を意味するそうです。聖地の悠久の歴史、そしてパレスチナとオリブのつながりの深さを実感させられました。

小林和夫(こばやし・かずお/ATJ)



特集



# 大規模地震から2年、被災地の現在 ～ミンダナオ島マキララ～

from フィリピン・ミンダナオ島マキララ

今から2年前の2019年10月、フィリピン南部に位置するミンダナオ島コタバト州マキララ町付近で、マグニチュード6を超える地震が3度にわたり発生し、その後も数カ月余震が続きました。当時の国連人道問題調整事務所の報告によると、この一連の地震の被災者は約35万人、家屋の全壊2万5800棟、半壊2万1800棟、103の避難所に約6万人、その他の場所に13万人が避難生活を送っているとありました。

マキララ町では10万人が被災、多くの建物が全半壊し、土砂崩れ、地

割れなどが発生しました。バラゴンバナナはマキララ町からも出荷されており、近隣のバタサン村やブハイ村などに生産者がいます。幸いバラゴン生産者や出荷責任団体のドンボスコ財団の関係者で命を落とした方はいませんでしたが、怪我人が出たほか、ドンボスコ財団の事務所や研修棟などは全壊し、スタッフや生産者の家屋にも大きな被害が出ました。

**緊急救援から復興に向けて** ドンボスコ財団は、自身も被災しながら、周辺地域を始め6つの町で早期に緊急救援活動を開始し、延べ4000人以上に食料配布を実施しました。地震によって集落が立ち入り禁止区域に指定された人びとの一部には、ドンボスコ財団のバラゴン畑を一部避難所として提供しました。また、仮設住宅建設用の資材や、衛生的な暮らしができるよう便器やホースを提供しました。仮設住宅周辺では、家庭菜園での野菜づくりを奨励し、有機農業の研修なども実施しました。その結果、地域の人びとがより自然に即した農業に関心を持つようになりました。自家消費以上のものができた場合には隣人と物々交換をしたり、地域の市場に出荷する人もいます。ドンボスコ財団の避難所に移り住んできた2つの集落の62家族は、政府による再定住地を提供されるまで待機予定です。

近隣地域での支援活動も、食料配布に留まりませんでした。マキララ町は山の中腹に位置し、豊かな水があります。以前は湧き水による水源が6つありましたが、地震により水源に影響が出たため、

新たな水源から水を引くパイプやホースの提供なども実施しました。

地滑りなどによりバラゴンバナナに被害を受けた生産者に対しては苗を供給しました。また、地震があってもドンボスコがバラゴンの出荷を継続している状況を見て、新たにバラゴン生産に取り組む人も出てきました。

政府が用意した避難所の中には、大手企業のバナナプランテーションに囲まれているところもあります。そこでは農業が日常的に散布されているため、住民は農薬の飛散に晒されており、早期の移転が必要です。避難所にいる先住民族のバゴボ・タガパワ族の人たちについては、国が認める先住民族の土地に戻れるように手配中です。



仮設住宅地での野菜づくり

## ドンボスコ財団の施設の再建

ドンボスコ財団は若者に向けた有機農業の研修を実施してきましたが、その事務所や研修施設は全壊し、その上、元々それらの建物があつた地域は断層があるため、建設禁止区域に指定されてしまいました。そのため別の敷地に新たに事務所、研修用の施設や食堂などを建設しました。そこで使用している建材は主に木材や竹などの自然素材です。自然素材を用いることにより、建物が崩れた場合でも、人的被害を最小限に抑えるという考えからです。2年前の地震で、2階建てのコンクリートの村役場の1階部分が完全に崩れて、死亡者や負傷者が出たことを教訓としています。

これらの支援活動には、日本やヨーロッパ、地元の協力者などからの支援金が活用されています。

ドンボスコ財団では、現在はまだ研修活動が再開できていませんが、生産者や研修生は再開できる日を楽しみにしています。

赤松結希(あかまつ・ゆき/ATJ)



倒壊したドンボスコ財団の施設



自然素材を使って家づくりをする住民